

雲と子守歌

小川未明

青空文庫

どんなに寒い日でも、健康な若い人たちは、家にじっとしていられず、なんらか楽しむの影を追うて、喜びに胸をふくらませ、往來を歩いています。こうした人たちの集まるところは、いつも笑い声のたえるときがなければ、口笛や、ジャズのひびきなどで、煮えくり返っています。しかし、路一筋町をはなれると、急に空き地が多くなるのが例でした。なかでも病院の建物の内は、この日とかぎらず、いつも寂然としていました。

どの病室にも、顔色の悪い患者が、ベッドの上に横たわったり、あるいは、すわったりして、さも怠屈そうに、やがて暮れかかろうとする、窓際の光線を希望なく見つめているのです。

「あなた、いい顔色をしているのね。」

このとき、火の気のない廊下で、すれちがった一人の看護婦が、同じく白い服を着た友だちに、言葉をかけました。

「そう、そんなに赤いこと。外の冷たい風に当たってきたからよ。」

「町へいつてきたの、うらやましいわ。私なんか、昨夜から休まないんですもの。」

「よくないの？ 困ったわね。」

「まだ若い奥さんなのよ。お子さんが二人もあるんですって、ほんとうに、お気の毒よ。なおればいいが。」

「あんたも、疲れるでしょう。お大事に。」

そういつて、二人は、たがいににっこり笑って別れました。

病人につききりの看護

婦は、手に氷袋をぶらさげていました。

健康の人の住む世界と、病人の住む世界と、もし二つの世界が別であるなら、それを包む空気、気分、色彩が、また異なっているではありません。そうすれば、これらの若い献身的な人々は、いったいどちらの世界に住むというべきであろうか。

ここは、病院の一室でありました。そこには、五つになる男の子が、ろつ骨カリエスにて、もう永らく入院していました。その子の看護には、真のお母さんが、あたりました。子供は、日増しにつる病勢のために、手足はやせて、まったくの、骨と皮ばかりになって、見るさえ痛々しかつたのでした。それだけでなく、ものにおびえるような目つきは、日に幾回となく、ゲリゾン注射や、ぶどう糖注射や、ときには輸血をもしなければならなかつたので、そのたび苦痛を訴えて、泣き叫ぶ事実を語るの

あります。子供の小さな肉体と可憐な魂は、病菌が、内部から侵蝕するのと、これを薬品で抗争する、外部からの刺激とで、ほとんど堪えきれなかつたのであります。

しかしながら、こうした子供の体にも、またすこしの間は、平静なときがありました。それをたとえるなら、一時間に幾十回となく、貨車や、客車が往復するために、熱を発し、烈しく震動する線路でも、ある時間は、きわめてしんとして、冷たく白光りをする鋼鉄の面へ、無心に大空の色を映すといったような具合です。

ちようど、子供の病室の窓から見える、青い空には、きぎんだ色紙をちらしたように、白い雲、赤い雲、紫の雲が、思い思いの姿で、上になり、下になり、遊んでいるのを、子供は、寝ながらながめていました。

「みんなして、鬼ごっこをしているんだね。」と、子供はひとりごとをいいました。すると、空の上で、耳ざとくききつけた、白い雲が、

「坊やも、お仲間におはいりよ。」と、呼びかけました。

「ぼく、足が弱くて、飛べないんだもの。」

「飛べるように、雲にしてあげるから、早くおいでよ。」

「ほんとうに、雲くもにしてくれるの？」

「いいとも、坊ぼうやの好きすな、雲くもにしてあげる。」

「そんなに遠とおくいけば、お母かあさんが見えなくなるだろう。」

「どんなに高たかいところからだつて見えみるさ。ここから、よく坊ぼうやが見みえるのだもの。」と、雲くもが、やさしくいいました。

さかんに燃もえていた、西にしの海うみの炎ほのが、いつしか波なみに洗あらわれて、うすくなつたと思おもうと、窓まじから見みえる空そらも、暗くらくなりかけていました。そして、白しろい雲くもも、赤あかい雲くもも、紫むらさきの雲くもも、どこへかかれて消きえてしまつたのです。

「みんな、お家うちへ帰かえつちまつた。」と、子供こどもは、さもさびしそうに、つぶやきました。ひとり自分じぶんだけが、置おき残のこされたように、頼たよりなさを感かんじたのでした。

晩ばんの食しょく事じを告つげる鐘かねの音おとが、廊ろうか下かの方ほうから、とびらを通して伝つたわりました。

「たいへん、おとなしかつたのね。気分きぶんがいいいでしょ。お母かあさんは、坊ぼうやのいいのが、なによりうれいんですよ。おみかんでもあげましようか。」と、お母かあさんがいいました。子供こどもは、これに対たいして、すげなく頭あたまをふりました。そして、うつろに開ひらいた目めで、電でん燈との光ひかりが、薄うすく弱よわ々よわしく漂ただよう、四方ほうを見みまわしました。ここには、明あかるい、清きよらかな、

空そらの喜よろこびはなく、すべてが灰はい色いろをして、ほこりがかかっているような気き持もちがしました。階かい下かにある、外がい来らい患かん者じゃの控ひかえ室しつに、かかっている時と計けいの、鳴なる音おとがしました。風かぜが、吹ふきはじめたようです。引ひき窓まどのガラス戸どは、いつか閉しめられました。月つきがなく、星ほしの光かりも射ささず、曇くもっているときみえ、外そとは暗くらかった。風かぜだけ、低ひくくかすめ、なんにでもぶつかつていく、そうぞうしいうめきがきかれたのであります。

子こ供どもは、白しろ壁かべの上うえを、戸とのすきまのあたりをじつと見みつめていました。このとき、そこから、忍しのび込こむ悪あく魔まがありました。はじめ灰はい色いろの雲くものようなものがはい出でました。よく見みると、その雲くもの上うえに、黒くろい着き物ものを着きた魔ま物ものが乗のっています。鋭すどい剣けんを手てに持もち、怖おそろしい顔かおをして、だんだん子こ供どもの体からだに近ちかづくのでした。

「痛いたいよ！ お母かあさん。」

子こ供どもは、逃にげるにも逃にげられず、もだえながら叫さけびました。

「お、おう、かわいそうに、また痛いたみ出だしたのですか。」

いたわる母はは親おやの目めは、すでに力ちからなく疲つかれていました。その言こと葉ばにも、たどえ親おやとはいえ、どうすることもできぬなげきが感かんじられました。しかたなく、いつものごとく、子こ守もり歌うたをうたつて聞きかせるのです。

まだ、この子が、まったく乳飲み子のときから、抱いたり、おぶったり、寝かせるとき、うたった歌であります。子供は、これを聞きつつ、うつつの世界から、夢の世界へ、夢の世界から、さらに遠い生まれぬ前の世界へとかよった、ただ一筋のまぶしい、かすかな路でありました。

「坊やは、いい子だ、ねんねしな、

泣かんで、いい子だ、ねんねしな。」

子供は、母の胸にしっかりと顔をおしつけ、耳をすましていました。耳というよりか、心をすましていました。そうする間だけ、痛みを忘れたのです。さいなまれる魂が、やわらかな、温かい愛のしらべに救われて、暗い中、風の吹く、はてしない広野をさまよい、林の方へ、知らない町の方へ、また、高い、高い、空の上へと、苦しみのない、安らかな場所を探しにいくのでした。そこには、おばけや、悪魔などの、けっしてわからない、ただお母さんと自分だけが知っている、いいところだと子供は信じているのでした。

また、母親は、声に真心が通じて、子供の苦痛がやわらげられるものなら、どんなにでもして、うたつてやろうと思いました。そして、安らかにすることによって、奇的に、病気がなおるよう、神に念じたのであります。

しかし、いかにやさしい、信仰深いお母さんでも、疲れれば、しぜんと眠気を催し、眠ることによつて、氣力を回復する、若い、健康な肉体の持ち主たることに変わりはありません。幾日、幾夜の看病の疲れが出て、いくら我慢をしても、しきれずに、歌の声は、だんだんかすれて、とぎれたのでした。

「お母さん、ほんとうに、うたつておくれよ。」

子供は、母に、真実にうたつてくれと訴えるのでした。驚き、氣をとり直した母親は、

「ほんとうに、うたつてあげますとも。知らぬまに眠つて、わるかったですね。坊やの苦しいのからみれば、お母さんは、どんなことでも、我慢しなければなりません。」

母親は、真剣になつて、子守歌をうたいはじめるのでした。母の愛から流れ出るなつかしい、細いしらべは、光る絹糸のように、切れんとして、切れずに、つづくのでした。子供は、それを頼りに、しんしんたる遠い道を、ただひとり旅をするのでした。鳥の鳴く、林の中を歩くこともあつたし、たちまち白い雲といつしよに、鬼ごっこをしていくこともありました。そのときは、いつのまにか、自分は、紅い雲となつていたので、

とつぜん、歌がやむと、糸がぶつりと切れて、からだは、真つ暗な穴の中へ落ち込むよ

うな気がしました。そして、ずきずきと痛み出しました。このとき、どこからともなく悪魔があらわれて、一所けんめいに逃げようとする自分を追いかけるのでした。

「こわいよう！ お母さん。」と、子供は、火のつくように、叫びました。

「おお、よしよし。」と、母親は、我が子をしっかりと抱いたのでした。

「お母さん、どこかへ行ってしまつてはいやよ。」

「どこへいくもんですか、坊やとここにいるじゃありませんか。」

「お母さん、じきだまつてしまうのだから。」

「いいえ、さつきから、うたっているのですよ。」

「よく、うたつてよう。」

母は、こんどは、しずかに、ゆつくりと力づくよく、うたいはじめるのでした。こうしてうたうことによつて、いくらかでも子供の気持ちか休まるなら、自分は、生命のつづくかぎり、どんなにでもして、うたうであらうとうたつたのでした。考えると、こうしてうたつたことは、今夜だけでなく、この子が生まれたときから、いくたびあつたであらう。たとえば、氣むずかしく、どうしても眠らなかつたときとか、病気で、夜じゆう泣き明かしたときとか、母として、べつに他につくす手もなければ、おばあさんに、自分がうたつ

てもらった記憶をわずかに呼び起こして子守歌をうたい、やっとねかしつけ、すこしでも安らかなれと祈ったのでした。母と子の愛に昔も今も変わりはなかったのです。

控え室にかかっている時計が、規則正しく、鳴るのが聞こえました。夜はしだいに更けていくのです。そのとき、暗い、寒い、廊下に立って、子守歌に耳を傾けている、おばあさんがありました。

「私も、せがれを大きくするまでには、いくど泣いたり、笑ったりしたかしれない。そして、戦争で、出征してからも、便りがなかったのは、一年や二年でなかった。実に長い間のことで、あの子の安否を気遣い、そのため、私は、やせてしまった。しかし死んだとは思われず、どこかに生きているものと、毎日かげぜんを供えて、ただ、あの子がどうかして無事に帰ってくれるのを待っていた。そのかいもなく、戦死の報知があったときには、私は、まったく気が転倒してしまった。しかし、いまだに、死んだと信ずることができず、どこか南の名もない島にでも生きているような気がして、きょうまではかない希望をつないでいるのではあるが、もしせがれが、草葉のかけに眠るとしたら、一人の母が、こうして、派出婦となつて、たよりなく、日を送るのを、どうして知るであろうか。」

哀あわれな老ろう婆ばは、しわの寄よるほおを流ながれる、涙なみだを手てでふいていました。

重おもい荷にでも積つんだトラックが、どこか外そとの往おう来らいのぬかるみに、はまり込こんだとみえ、

先さつき刻きから、けたたましく笛ふえを鳴ならして、抜ぬけ出でようとあせている。それが、なんで病びょう

床しょうに横よこたわる、患かんじや者じやたちの安あん静せいを妨さまたげずにおくことがありましよう。おばあさんは、

ついにたまりかねて、足あし音おとをたてぬように、階かい段だんを下おりると、ようすを見みに外そとへ出で

いきました。

いつしか、人ひとの気きづかぬうちに、天てん気き模も様ようはがらりと変かわっていました。真まつ暗くらな空そらは、

ただ一つの星ほし影かげだに、目めにとまらなかつた。吹ふきすさぶ風かぜにまじる粉こな雪ゆきが、顔かおを打うち、

もつれた髪かみに、降ふりかかりました。

あちらには、獐どう猛もうな獣けものの、大おおき目めのごとく、こうこうとした黄きいろ色の燈とも火しびが、無ぶ気き

味みな一ひと筋すじの線せんを夜よるの奥おく深ふかく描えがいているのです。

翌よく日じつの明あけ方がた、子こ供どもは、ついにこの世せ界かいから去さりました。雪ゆきは、その道みち筋すじを潔きよめる

ため、白しろく化け粧しょうして、野の原はらや、森もりまでを清せい浄じょうにしました。そして、風かぜは、悲かなしむ母は

親はに代かわり、はるかなる国くにへさまよいゆく、みなし子このために、かすれがちな声こえで、子こ

守もり歌うたをうたつてきかせるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「新児童文化 第1冊」

1946（昭和21）年8月

※表題は底本では、「雲《くも》と子守歌《こもりうた》」となっています。

※初出時の表題は「雲と子守唄」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雲と子守歌

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>